

衛生思想普及の先駆者・松本良順

作家 童門冬二

士魂洋医のオランダ医者

慶応4（1868）年9月8日に改元されて年号は明治となった。ことしはそれから150年目に当たるといふことで、いろいろな行事が催されている。

幕末から明治にかけて、識者は日本人の生き方についていろいろな道標を掲げた。開国によって260年にわたる“閉ざされた国”の玄関や窓が開けられ、ドッとヨーロッパの文化がとびこんできたからだ。そのため日本人のよき生活習慣や美風も汚され、「皆が外国かぶれになってしまう」と憂える識者が沢山いた。これらの識者は、「外国の文化をとり入れるのはよいが、日本人精神を失うな」と主張した。「和魂洋才（芸。外国のとくに科学知識や技術）」・「東洋の道徳・西洋の科学」などと唱えた。

明治になってからは武士が商人に転身する者が多かった。しかし商を賤しむ儒教の影響は依然として残り、「士魂商才」などという「言葉」が流行した。「商人になっても武士の精神を忘れるな」という主旨である。この稿で紹介する松本良順は“士魂洋医”と叫ぶ。もちろんこんな言葉はない。主旨は「日本の武士の精神を忘れずに、ヨーロッパのすぐれた医術をおこなう」ということである。

良順の父は順天堂の創始者佐藤泰然で、オランダ医学者だった。早くから病院建設の志望を持っていた。良順は次男だったので幕医松本良南の養

子になった。猛反対が起った。当時の幕医は「医学館」という組織が主管し、医学館は漢方医の多紀氏が主宰していた。いきおい属する医者もすべて漢方医だ。

「その中にオランダ医者の息子を迎え入れることはできない」という偏狭な固定観念に支配されていた。蘭（オランダ）学は“蛮学”と蔑称され、とくに人体解剖を嫌悪した。

しかし良順は凹まなかった。医学館に「試問してほしい」と申出た。試問会がおこなわれた。居並ぶ漢方医から雨のように意地の悪い質問が降り注いだ。

ところがそれらの一問一問に対して、良順は謙虚に的確に答えた。良順は信念を持っていた。「疾病はその予防に努力すべきだ」ということと、「そのためには汎国民的に衛生思想の普及が大切だ」ということだ。この観点に立てば漢方もオランダ医学も関係ない、両方のいいところを普及すればいいではないか、という論である。

医学館の連中は声を失った。中には共感する者さえいた。良順は合格した。医学館の医者も「漢方だけを墨守すべきではない、オランダ医術も導入すべきだ」という声を立て、良順をリーダーにした。良順は大っぴらにオランダ医学を坪井信道に学び、さらに幕命によって長崎に行き、幕府海軍伝習所付の軍医ポンペに学んでさらに磨きかけた。ポンペは良順のひたむきな姿勢を受し、

「きみは日本の武士の美点をことごとく備えている」と告げた。そして「ふたりで医学伝習所をつくろう」と誘い、日本ではじめての西洋医学を系統立てた学校を設立した。

親幕への傾斜

こういう経過を辿っていたので、良順には当時炎となりつつあった“倒（討）幕”の思想は湧かなかつた。「幕府は自分ののぞみをすべてかなえてくれるいい職場」だったのだ。

その思いをさらに助長したのが14代将軍徳川家茂の、かれに対する絶大な信頼であった。主治医に選ばれてからは、家茂は良順を離さなかつた。「主治医の職勢は、常時よく家茂の身辺にあって健康を管理することである」と勝手な理屈をつけて、どこへ行くにも良順を連れて歩いた。

家茂の妻は時の帝孝明天皇の妹和宮だったので時折京都にも行った。京都で良順は新選組の局長近藤勇と仲良くなった。懇談の折、近藤が、「俺は幕府のおエラ方は嫌いだが上様（家茂）だけは大好きだ。あの人のためなら命も捨てる」といった。良順は思わず、「私も同じだ」と共鳴した。ふたりは親友になった。

良順はこうして親幕の道を歩いたので、幕府の奥医帰法眼兼医学所頭取・歩兵奉行格海陸軍医総長という、医官のトップ・ポストに就いた。だから戊辰戦争の時は江戸城が政府軍の手に渡ると、思いを同じくする門人たちを連れて会津に脱走した。戦乱中は負傷兵の手当に走りまわった。

宿題は国民への衛生思想の普及

やがて新政府に抗していた東北諸藩が会津をはじめ降伏すると、良順も捕えられて江戸改め東京に送られた。が、すぐ釈放された。

これは政府軍の中であつて、「国軍は武士に限らず農工商を含めたあらゆる階層から選ぶべきである」と、“国民皆兵”を唱える長州出身の山県有朋が、国軍創立の責任者としてかねてから良順

の「国民に対する衛生思想の普及」の主張に着目していたからだ。それに良順は幕府陸海軍の軍医総長でもあつた。山県の率いる国軍にはそういう人材がまだいなかった。

もちろん周囲では、「旧幕府に仕えた者を再雇用する必要はなかろう」と反対する者は沢山いた。しかし山県は、「医術だけならたしかにすぐれた人物は沢山いる。しかし“国民への衛生思想の普及”などという、途方もないことを叫ぶ者はかれ以外いない」と、なぜ良順を重用したいかの理由を告げた。山県は長州人で高杉晋作のつくった奇兵隊の幹部であり、吉田松陰の松下村塾の門人でもあつた。村塾時代は“ただの棒っ切れ”として馬鹿にされた。だから“疎外される者”の悲哀や屈辱、憤りは身にしみていた。

良順自身は将軍家茂の庇護もあつて、幕府時代は別に疎外感を味わったわけではないが、自説の「衛生思想の普及」について共鳴し、自分に接近してきた山県には好感を持った。

つまり、「士はおのれを求める者には命も預ける」という昔の武士の心意気だ。“人生意気に感ず”の俠気でもある。

釈放後、良順は東京の早稲田（新宿区）で私立病院を開いた。誰も祝いにこなかつた。新政府の手前を憚かつたのだ。

（日本人というのはいつまでたつても同じだ）。良順はそう思ったが気にはしなかつた。養子に行く時に幕府医学館の漢方医たちに反対されたことは、やはりトラウマとして頭の一角にこびりついている。しかし「そんなことは些事だ。武士はもっと大局的な立場に立つてものを考えなければいけない」。

それが“衛生思想の普及”なのだ。山県は「それをまず国軍の将兵から始めてほしい」といった。良順は承知した。兵部省に入った。衛生部を設置し、軍医制度の確立に努力した。衛生思想の普及をまず国軍の将兵から始めた。かれの士魂は変らずに燃えつづけた。